

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：保健

2023年9月1日(金) 13:00 ~ 14:00 | 会場 RY207 良心館 2階 R Y 2 0 7 番教室

保健／ポスター発表

[10保-ポ-01] 幼児期の腸内細菌叢に関する研究

*高橋 珠実¹ (1. 東洋大学)

[10保-ポ-02] 保健の学習に活用するための生活に基づく概念の整理

*物部 博文¹、砂田 芽衣²、小浜 明³ (1. 横浜国立大学、2. 堺市立赤坂台中学校、3. 仙台大学)

[10保-ポ-03] 暑熱環境での日射を模した輻射熱暴露の有無が低強度運動時の体温調節反応におよぼす影響

*山下 直之¹、久米 雅²、逸見 俊太³、芳田 哲也¹ (1. 京都工芸繊維大学、2. 京都文教短期大学、3. 京都工芸繊維大学大学院)

[10保-ポ-04] COVID-19禍における子どもの傷害に関する研究動向

PubMedを用いたシステマティックレビュー

*佐藤 海音¹、上野 亜海¹、湊谷 勇次²、笠井 茜³、鹿野 晶子³、野井 真吾³ (1. 日本体育大学大学院 博士前期課程、2. 日本体育大学大学院 博士後期課程、3. 日本体育大学)

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 保健

保健／ポスター発表

2023年9月1日(金) 13:00 ～ 14:00 RY207 (良心館2階 R Y 2 0 7 番教室)

[10保-ポ-01]幼児期の腸内細菌叢に関する研究

*高橋 珠実¹ (1. 東洋大学)

【背景・目的】健康に大きく関わることで近年注目されている腸内細菌叢に関する研究は成人を対象に行われているものが多く、子どもを対象とした研究は数少ない。特に幼児期の腸内細菌叢に関する研究はまだこれからの分野であることから、本研究は幼児の腸内細菌叢の組成の解析を行い、その特徴や多様性、腸内細菌叢とからだの健康との関連を検討していくことを目的とした。

【方法】今回の研究対象者は山間部の園児（S群）20名、山間部と都市部の中間地域の園児（T群）24名とした。調査・検査項目は、生活習慣調査、からだの健康調査、および腸内細菌叢検査とした。生活習慣等調査は、独自に作成したものを用い、睡眠習慣、食事習慣、運動習慣等の基本的な生活習慣等の調査を行った。腸内細菌叢検査では、保護者に協力を依頼して収集し、16S rRNAメタゲノム解析をゲノムリード株式会社に委託した。

【結果・考察】属レベル Bacteroides、Bifidobacterium、Prevotellaの結果から、BacteroidesとBifidobacteriumを多く保有することを特徴とするBBタイプとPrevotellaを多く保有する特徴を持つPタイプとに分けてみると、全体では84.1%（37/44名）がBBタイプ、15.9%（7/44名）がPタイプであった。一般的に高脂肪の現代食とともにヒトの腸内細菌叢のタイプはPからBBタイプに移行するとされているが、今回の結果は先行研究の結果よりも高い割合でPタイプの子どもの確認された。2群間の比較においては、S群とT群の門および属レベルの占有率で有意差がみられた菌種が確認され、多様性においてもS群とT群の間に有意差が認められた。また、からだの健康調査の合計点と門レベルの占有率との間に関連がみられたことから、さらなる検討の必要性が考えられた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 保健

保健／ポスター発表

2023年9月1日(金) 13:00 ～ 14:00 RY207 (良心館2階 R Y 2 0 7 番教室)

[10保-ポ-02]保健の学習に活用するための生活に基づく概念の整理

*物部 博文¹、砂田 芽衣²、小浜 明³ (1. 横浜国立大学、2. 堺市立赤坂台中学校、3. 仙台大学)

人間は日常経験から自然現象に関する自分なりの理解を作り上げている。保健に限らず、学習場面でそれらの概念が課題となったり、学習に活用されたりする場面がある。例えば、田島（2003）らは、教室文脈で概念を理解しているように見える学習者が、日常経験知など他の社会文脈における知識との関連づけの解釈を求められた場合に応答できず、かれらの理解の成立が疑問視される現象を分かったつもりと呼び、説明活動による理解の促進を試みている。一方で、藤岡（1989）は、よい問題の4つの基準として具体性、検証可能性、意外性、予測可能性をあげているが、このうちの意外性は日常経験による自然現象の自分なりの理解と教室文脈との齟齬が関わりと予測される。このような概念は、素朴概念(naive conception)、日常概念(everyday conception)、誤概念(misconception)などと表現されるが、Millar(1989)によると、mis-、alternativeなど形容する言葉と idea、meaningなど学習者の知識を表す用語との組み合わせの数があるとされる。本研究では、保健の学習に子供の日常経験による自然現象の自分なりの理解を活用するという観点から概念整理するとともに、データベースを用いてキーワード検索し、過去の研究を整理することを目的とした。日常経験に基づいた自然現象に関する自分なりの理解を尊重し、科学的な概念を絶対視しないという観点からすると、誤概(misconception)よりも素朴概念(naive conception)が適切であると考えた。「CiNii Reserch」により最も多くの論文が検出されたキーワードは素朴概念で537件であった。「Pub Med」で最も多く検索されたのが misconceptionの11925件と、国内外で研究のアプローチが異なる状況が明らかにされた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 保健

保健／ポスター発表

2023年9月1日(金) 13:00 ～ 14:00 RY207 (良心館2階 R Y 2 0 7 番教室)

[10保-ポ-03]暑熱環境での日射を模した輻射熱暴露の有無が低強度運動時の 体温調節反応におよぼす影響

*山下 直之¹、久米 雅²、逸見 俊太³、芳田 哲也¹ (1. 京都工芸繊維大学、2. 京都文教短期大学、3. 京都工芸繊維大学大学院)

学校生活上、日向を長時間歩くことがあるが、その時の体温調節系への負荷はほとんどわかっていない。本研究は暑熱環境での日射暴露の有無が歩行を模した低強度運動時の体温調節反応に及ぼす影響を検討することを目的とした。実験対象者は12名の若年男性(年齢 21 ± 2 歳、身長 173.4 ± 5.7 cm、体重 68.4 ± 10.8 kg、体脂肪率 $19.1 \pm 3.8\%$ 、最大酸素摂取量 38.0 ± 4.3 ml/kg/min)であった。実験条件は日射有条件(室温 29°C 、相対湿度 60% 、黒球温度 45°C 、湿球黒球温度 28°C)と日射無条件(室温 29°C 、相対湿度 60% 、黒球温度 29°C 、湿球黒球温度 25°C)であった。実験運動は歩行と同程度の負荷である最大酸素摂取量の 30% 負荷強度にて1時間の自転車こぎ運動を行い、その間の直腸温、皮膚温、前腕局所発汗量を測定した。実験前後の体重変化から体重減少量を算出した。運動後の直腸温の上昇度では日射有条件(約 0.4°C)と日射無条件(約 0.4°C)との間には有意差はなかった($p=0.60$)。平均皮膚温の上昇度では日射有条件(約 1.9°C)が日射無条件(約 0.8°C)に比較して有意に高かった($p<0.001$)。前腕局所発汗量では日射有条件(約 $0.63 \text{ mg/cm}^2/\text{min}$)が日射無条件(約 $0.30 \text{ mg/cm}^2/\text{min}$)に比較して有意に高かった($p<0.001$)。したがって、体重減少量も日射有条件(約 0.6kg)が日射無条件(約 0.3kg)に比較して有意に多かった($p<0.001$)。これらのことから、暑熱環境で日射に曝されながら低強度運動を行った場合には、日射が当たらない場合のそれと比較して核心温の上昇度は同程度かつ軽度に抑えられるが、それは発汗量の増大によることが示唆された。したがって、日射に曝されるような環境では低強度運動であっても積極的な水分補給をする必要性が示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 保健

保健／ポスター発表

2023年9月1日(金) 13:00 ～ 14:00 RY207 (良心館2階 R Y 2 0 7 番教室)

[10保-ポ-04]COVID-19禍における子どもの傷害に関する研究動向

PubMedを用いたシステマティックレビュー

*佐藤 海音¹、上野 亜海¹、湊谷 勇次²、笠井 茜³、鹿野 晶子³、野井 真吾³ (1. 日本体育大学大学院 博士前期課程、2. 日本体育大学大学院 博士後期課程、3. 日本体育大学)

【目的】新型コロナウイルス感染症（以下、「コロナ」と略す）の流行による活動自粛は人々の生活を一変させた。そのような中、保育・教育現場からは運動不足、生活リズムの乱れ、スクリーンタイムの増加、視力の低下、肥満・痩身の増加の実感とともに、「骨折が増えた」、「いままでにはなかったようなケガが増えた」、「ボールが顔面に当たるケガが増えた」等といった子どもの傷害に関する心配も多く寄せられる。これらの実感は、コロナ禍による生活の変化が視力の低下や肥満・痩身の増加、精神的健康の悪化だけでなく、学校管理下での子どもの傷害の様相も変化させている可能性を推測させる。そこで本研究では、コロナ禍における子どもの傷害実態を検討するための第一段階の作業として、PubMedを使用して関連研究動向を明らかにすることを目的とした。【方法】データベースにはPubMedを用いて、オンライン検索は2019年以降の論文を対象とし、injury AND COVID-19 OR coronavirus OR SARS-CoV-2の検索式で実施した。その際、検索フィールドはTitle/Abstract、年齢はChild:6-12 years、Adolescent: 13-18 years、言語はEnglishで絞り込みを行った。検索日は、2023年5月5日であった。【結果】本研究の結果、573件の論文が検索された。さらに、それらの論文に目を通した結果、総説論文、対象年齢外の論文、子どもの傷害に言及していない論文、コロナ禍による変化に言及していない論文等を除外してそれらを概観した。その結果、多くの研究でコロナ禍による子どもの傷害実態の変化が指摘されていた。（付記）本研究は、日本体育大学スポーツ危機管理研究所プロジェクトの一部として実施されたものである。